

御蔵島と青ヶ島 2023

旅のチカラ研究所

2023年7月

旅のチカラ研究所 植木圭二

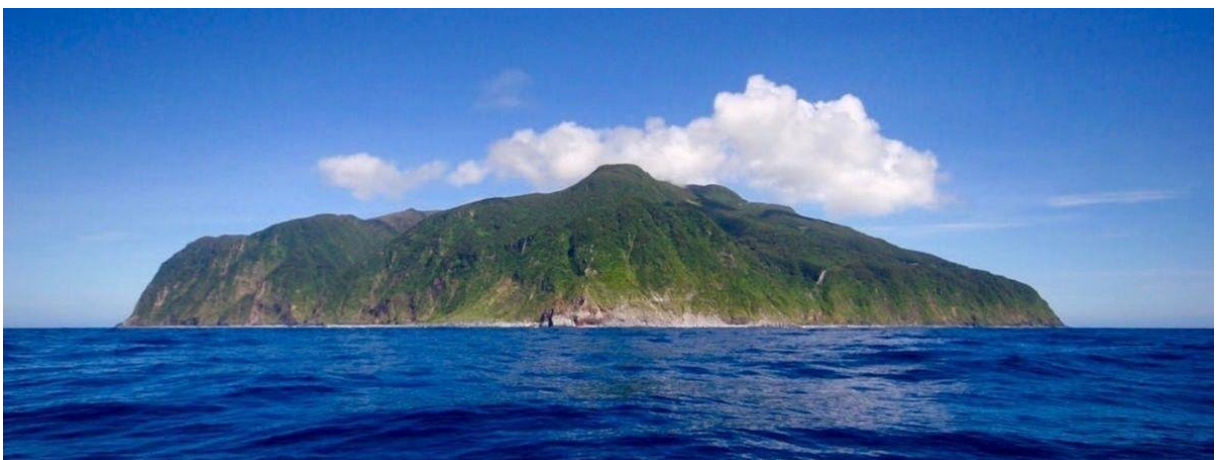
伊豆諸島の御蔵島（みくらじま）と青ヶ島に友人と行ってきた。御蔵島は伊豆諸島の旅で私が唯一行くことができなかつた島で、ようやくリベンジを果たすことができた。青ヶ島は2度目の訪島になったが、簡単には帰してくれなかつた。

第一章 御蔵島

■再度のチャレンジ

御蔵島は宿を予約していないと島に渡れないという離島である。それは島の宿泊施設が極めて少ないからで、船は1日2回入港するので日帰りの行程も組めるのだが、帰りの船が欠航すると泊まる宿がないという状態になる。

私は昨年この島を何度か訪れようとしたが、宿が予約できなかつた。それは直前の予約だったからで、今回は2カ月前に宿を予約した。それでも半分くらいの宿は既に満室だった。



【御蔵島（観光協会の画像）】

再挑戦の御蔵島は当初一人旅を考えていたが、友人に話すと「ワシも行きたい」ということで、二人旅になった。もちろん彼にとっても初めての訪島になる。

その友人と私とは昔からの長い付き合いで、よく一緒に飲みに行くので私が“酒の師匠”と仰いでいる。師匠は最近現役を退きリタイヤしたので、いつ帰れるか分からないような島の旅にもいけるようになった。

そして昨晚、私たちは御蔵島挑戦を前にして東京竹芝桟橋近くの居酒屋で事前打ち合わせと称して、景気付けに一杯やって 22 時 30 分出港の船に乗り込んだ。案の定、船上でも打ち合わせが続いた。便利なもので明け方には御蔵島に着くことになっている。

■お椀を伏せたような島

御蔵島のパンフレットには島の形について、お椀を伏せたような島だと書いてある。

その表現は決してハズレではないが、私は初めてこの島の写真を見た時に別のものが思い浮かんだ。

それはエジプトの屈折ピラミッドで、途中で傾斜角が変わっているという珍しいピラミッドだ。地面からそそり立っている下の部分の傾斜角は 54 度、そして途中からやや緩やかな傾斜角 43 度になっている。



【エジプトの屈折ピラミッド】

屈折ピラミッド程ではないが、御蔵島も海岸から急峻な崖がそそり立って途中で緩やかになっている。島のほぼ中央にある御山（おやま）は標高 851m もあり、海上から見るその姿は威風堂々としている。

御蔵島の近くの三宅島や神津島の周辺の海底は水深 100m 程だが、御蔵島の周辺は水深 1500m もある。だから海底から見ると御蔵島は 2300m 級の山になり、その頂上部分だけが海上に出ている。このことがこの島の近海にイルカが多く生息していることに関係しているのかもしれない。

朝 6 時、既に日の出の時間は過ぎているが、梅雨時なので空は鈍よりとしている。そんな中、船は御蔵島港の桟橋に接岸する。桟橋の目の前には急峻な崖が立ちはだかつており、その崖の上にはいくつかの建物も見える。

私たちは桟橋に降り立ち、私は「ようやく来た、御蔵島だあ！」と発し、師匠は「ウオー、スゲー！」と叫んでいる。やはり相当感動している。

ありがたいことに民宿の車が迎えに来てくれている。民宿は近いので歩いて行くつもりでいたが、車に乗って走り始めてから迎えに来てくれた理由が分かった。結構な急坂で荷物を持ってこの坂を登るのは辛い。やはり屈折ピラミッドを侮ってはならない。

民宿に到着して談話室で一休みしていると、何人もの宿泊客がウェットスーツを着込んでイルカウォッチングに出発する。私たちはそれを見送って、島内探検に出かける。



【御蔵島港の棧橋から見た光景 左は乗って来た船 崖の上に建物が見える】

■ 島内探検

島内探検と言っても御蔵島にはレンタカーもレンタサイクルも、もちろんタクシーもバスもないから来島者は自分の足で歩くしかない。

しかし歩いて見て回れる場所は猫の額ほどしかない。それは険しい地形ゆえに住宅が建てられる場所が限られているからで、そこに約 300 人の島民が暮らしている。

その集落から都道 223 号線が東に伸びているが、歩いては行けないような距離に神社や滝などがある。そして都道は行き止まりになっており島内一周はできない。

都道も集落の中の道も狭くて坂が多い。家と家の間もかなり狭く、狭い斜面に無理矢理に家を建てたというのがよく分かる。それもある時期にまとめて建てたのではなく、数十年、数百年の間に増築や建て直しを繰り返してきたことが見てとれる。

道は狭い路地も含め全て舗装されている。それは雨が多いこの島では、舗装していないと露出した地肌の土が雨水に流されてしまうからだろう。いくら狭いといってもコンクリートで固める費用は馬鹿にはならない。そんなことができるのは財政豊かな東京都という大きな後ろ盾があるからに違いない。



【集落の坂道】

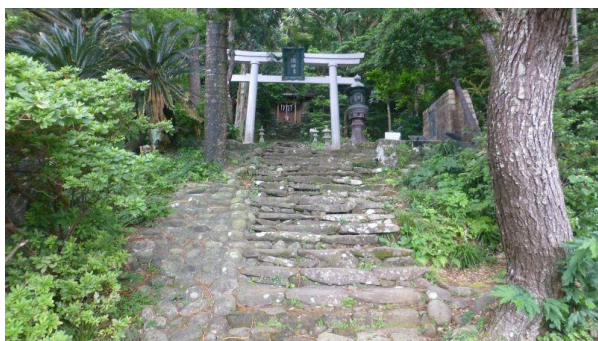


【斜面に建つ家々】

伊豆諸島は東京都の島なので、駐在所のお巡りさんは警視庁の所属で、品川ナンバーの車が走っている。そのため初めて伊豆諸島を訪れる人は品川ナンバーに驚く人が多い。師匠もそのひとりらしく、「品川ナンバーの軽トラなんか、見たことない」と言っている。確かに私も品川で軽トラックを見かけたことがない。

坂を登って行くと保育園がある。小ぢんまりとしているが結構立派な保育園で、園庭も今まで見て来た街並みを考えるとかなり広く感じる。当たり前の話だが、園庭なのでもちろん平らで、傾斜していない。

園庭の奥に鳥居があって稲根神社と書かれている。私たちはそつと園庭を通り抜け、鳥居の下で一礼をしてからゴツゴツした石の階段を数十段登って参拝する。いつものように旅の最初の参拝はこれから始まる旅の安全祈願と決めている。



【稲根神社の入口】



【稲根神社の階段から保育園を見る】

近くにある看板には、ここは拝殿で本殿は島の南側の稲根ガ森にあると書かれている。

その本殿について伝承によれば、稲根ガ森にキラキラ光り輝く物があったので、近くに行ってみるとそれは鏡だった。そこでその鏡を神体とする稲根神社を創建したとある。しかし住民の住む集落から遠い山の中なので、保育園の隣に拝殿を造った。いや順番は逆で、先に拝殿が造られたのだろう。

この神社はさまざまな神々を合祀しているとも書かれている。そういえば御蔵島という名前の由来は「神が宝物をしまう蔵を置いた島」と聞いたことがある。蔵があればいろいろな神が出入りする。

村役場の隣には大きく綺麗な建物があり、門柱には御蔵島小学校・中学校と書かれている。村役場が貧相に見えるほど立派な校舎で、その前には広い校庭がある。保育園の園庭も広がったが、この校庭はその十倍くらいある。芝生も張ってあり、まるで別世界に感じられる。

近くにいた学校関係の人と思われる人に聞いたら小学校は 27 人、中学校は 8 人の子供が通っているというから思っていたよりも多い。島の人口の 1 割以上になる。日本全体の小中学生の生徒数は 1 千万人を切っているから、日本全国少子高齢化の中で御蔵島はちょっと異なるようだ。この校舎と校庭を見ていると島全体で子供を育てていこうという強い意志を感じる。



【御蔵島村小中学校の校舎と校庭】

■観光案内所

観光案内所・観光資料館があるので入ってみる。資料館には御蔵島を説明する展示物があり、は御蔵島を“海上の森”と表現している。実に言い得て妙なキャッチコピーだ。

3人のスタッフが仕事をしている。仕事をしているのは当たり前にしても、1人は英語で電話をしている。離島の観光案内所と思えない光景に私と師匠は驚いてしまう。この島には外国人も多く訪れるのだろう。

今は来館者もないので、スタッフに声を掛けて島の話聞かせてもらうことにした。

私は「歩いて行ける観光名所はありますか？」と聞くと、「御蔵島には観光名所と呼べるものはありませんから、海でイルカと遊ぶか、山を歩くかですね」と答えてくれる。

どちらもそれなりの装備やガイドが必要で、今回私たちはそのような準備をしてきていない。

それでも根掘り葉掘り島の特産品や島民の暮らしを聞いていくと、むしろあまり多くの人に御蔵島に来てほしくないという雰囲気が伝わってくる。“観光に来ないでくれ”とまでは言わないまでも、身の丈に合った暮らしをしたいというのが本音のようだ。

それは同じ伊豆諸島の利島に似ている。利島は観光に不熱心で、椿油の産業で島民生活を支えている。人口は約300人で御蔵島と同じ、島民の多くは移住者で、その移住者によって産業や社会基盤が成り立っている。(詳しくは旅行記「利島の旅 2022」参照)

そのことを私が彼らに話すと、彼らは口をそろえて「我々も移住者ですよ」と言っている。

ついでに私が「御蔵島の主要産業は何ですか？」と聞くと、スタッフの1人が「自給自足です」と胸を張って答えてくれる。私は自給自足が産業になるのかと疑問に思いつつも、この予期せぬ回答が何故か腑に落ちた。

ライフラインのことを聞く。島内には火力発電所も水力発電所もあり電気は問題ない。離島の課題と言えば水だが、水力発電所があるくらいなので水は豊富だという。

私はそれを聞いて神津島の「水配り伝説」を思い出した。伝説は以下のようなものだ。

出雲の神々が伊豆にやってきて、最初は熱海沖に初島を創り、次に神々が集まる島として神津島を創り、神津島を拠点に南北に島を次々に創った。各島にはそれぞれの神を配し、神津島に神々が集まり会議をした。議題は水の分配方法で、会議の結論は次の朝に先着順で分けることになった。翌朝一番早く来たのは御蔵島の神で、御蔵島は最も多く水の配分を受けた。次は新島、八丈島、三宅島、大島、最後に寝坊した利島の神がやってきた時には水はほとんど残っていなかった。

この伝説によると御蔵島は神のおかげで最も多くの水を得た。だから稲根神社をはじめ島内には7つも神社がある。実際は“海上の森”だから雨が多く保水力もあるのだが・・・。

そんなことを考えた時に島名の由来「神が宝物をしまふ蔵を置いた島」の意味が分かった。その宝物とは豊富な水のことだった。

あるスタッフが「その伝説で御蔵島の神が最初に来たでしょう。これは御蔵島の島民気質を実に良く表しています。その理由は、沖縄などで島時間と言えば、のんびりして時間にルーズなことを意味しますが、ここでは御蔵時間というのがあって、何でも早くてせっかちなのですよ。例えば漁に出るから朝5時に待ち合わせしても、4時には集まっています。移住してきた当初はそんなことは知らないから何度か遅刻しました。いや遅刻ではなく実際は間に合っていたのですが・・・」とエピソードを含めて島民気質を教えてくれる。

今度は私が前回の伊豆諸島の旅のテーマでもあった「伊豆諸島には有人島が9島ありますよね、それなのになぜ伊豆七島なのですか？」と聞くと、そのスタッフが「水配り伝説で神津島を拠点に南北に3つずつ島を創ったから7島でしょう。青ヶ島は遠いから、式根島は新島の配下なので外された。今でも新島と式根島の島民が飲むと最後は“水を止めるぞ”ですよ」と言っている。

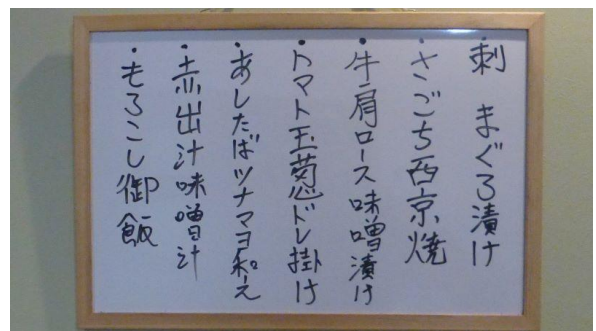
私は「御蔵島に来たので伊豆諸島を制覇しました」と話すと、別のスタッフが、「私も全て行ってきましたよ」と言っている。私が「どの島が一番お勧めですか？」と聞くと、彼は「式根ですね、海中温泉の地鉦（じなた）温泉は最高です」と言い、私は「確かに地鉦温泉はいいですね、でも私は神津島を推しますね」と、理由をあれこれ付けて説明した。彼ももちろんそれを知っており、なかなか深い伊豆諸島談議になった。

隣で聞いていた師匠は驚きと感激からメモを取っている。伊豆諸島ファンになったようだ。

■夕食

民宿に戻り夕食になる。食堂に行くと本日のメニューがホワイトボードに書かれて壁にかかっている。いろいろな島の民宿で食事を食べてきたが、これは珍しい。

テーブルにはメニューどおりの料理が並んでいる。私は観光案内所の自給自足の話を出し、民宿の人に「マグロはこの近海で獲れるの？」と疑問をぶつける。



【民宿の夕食メニュー】

すると「マグロは御蔵でもよく獲れるよ」と言っている。ついでに「サゴチはどんな魚？」と聞くと、「鱈（さわら）の幼名だよ」と教えてくれる。

あしたば（明日葉）やトマト、玉葱はもちろん自家製だろう。さすがに牛肩ロース味噌漬は島内では無理だろうと言いながら、師匠と私はビールで乾杯する。



【民宿の夕食】

食堂には10人くらいの宿泊客が食事をしており、その人たちと話をすると、私たち以外の宿泊客全員がイルカと泳ぐことを目的にこの島に来ていることが判明する。私たちが単なる観光で来たと言うと、信じられないといった反応を示している。

私たちの隣に座ったおばさん2人組は30年以上もこの島にイルカウォッチングに通っていると、イルカと一緒に泳ぐ魅力に取りつかれたという。御蔵島の近海にはイルカ150頭が住み着いており、必ずイルカと会える。それも1頭、2頭ではなく10頭以上のイルカと会えるからこの島に毎年来ているという。約20km離れた隣の三宅島からもイルカウォッチングの船が出ているが、御蔵島近海まで小さな漁船で1時間くらいかけてくるので船酔いをしたという。やはりこれは御蔵島周辺の海底の深度が1500mという地形がイルカにも影響しているのだろう。

若い3人組の女性グループは立派な水中カメラを持って来ており、こちらは何年も来ていると言っている。

2人連れのカップルは初めてのイルカウォッチングということで、ウエットスーツもシュノーケリングセットも全て民宿で借りて潜り、また来たいと言っている。

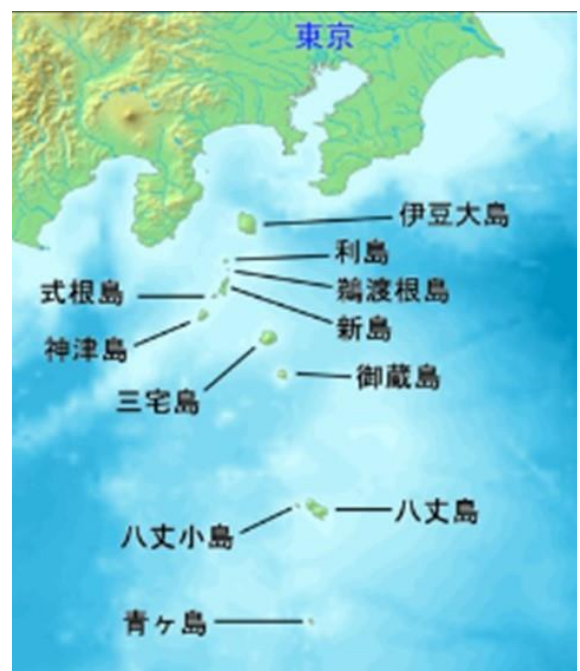
夕食はイルカの話で盛り上がり、その後私たちは部屋に戻って本日の反省会と称して飲み直す。

師匠は伊豆諸島に興味を持ったようで、私は過去の旅で知ったことを話始める。

伊豆諸島は江戸幕府直轄領だった。明治維新で静岡県になるが明治11年東京都になった。有人島は9島、かつて人が住んでいた島は鵜渡根島（うどねじま）と八丈小島だと話をする。

熱心に聞いていた師匠は、舟を漕いでいる。島なので舟を漕ぐとは、実に分かり易い。

明日は青ヶ島に行くために朝5時半に民宿の人に港まで送ってもらうことになっているから、そのまま私も眠りにつく。



【伊豆諸島】

第二章 青ヶ島

■2 度目の青ヶ島

青ヶ島には、私は昨年 5 月に訪島しており、今回は師匠のたつての願いでの再訪になる。どうやら青ヶ島の焼酎「青酎」を現地で飲みたいというのが本音のようだが、それは口にこそ出していないが、長年の付き合いで手に取るように分かる。

青ヶ島に渡る定期船の就航率が 5 割くらいなので、半分は欠航する。そのため多くの来島者はヘリコプターで渡るのが、このヘリコプターの予約の電話が繋がらない。1 カ月前私は 170 回も電話を掛けた。御蔵島は宿の確保、青ヶ島は交通手段の確保が課題になっている。

私たちは御蔵島から八丈島に船で渡り、そこからヘリコプターで青ヶ島を目指す。ヘリコプターは 11 人乗りで操縦士と助手を除くと乗客は 9 人しか乗れない。

八丈島空港から私たちが乗ったヘリコプターは離陸し、しばらくして御蔵島が見えてくる。

前回の訪島は船だったので、断崖絶壁の海岸に無理矢理に栈橋を築いた港を見て、この島は人間の侵入を拒んでいるかのようだ、第一印象を書いた。しかし今回はヘリコプターで約 20 分のフライトで着いてしまったので全くそんな感じはしない。



【青ヶ島のヘリポート 私たちを乗せてきたヘリコプター八丈島に向けて飛び立つ姿】

ヘリポートは島の中心地の直ぐ近くにあるので、歩いても民宿に行けるが、予約したレンタカーが迎えに来てくれている。勝手知ったる我が家のように車を走らせて島内の名所を師匠に案内して回る。青ヶ島は相変わらず秘境で、師匠は所構わず写真を撮っており、相当興奮しているようだ。残念だったのは「ふれあいサウナ」が休館日で入れないことくらいだ。

1年前に来た時、私はこの島の大自然と共生する人々の暮らしに感激していた。残念ながら今回は、そういった感動はあまりない。(その時のことは旅行記「伊豆諸島の旅Ⅱ2022」参照)

「旅とは非日常への移動」が私の持論である。そして旅の感動は非日常の度合いに応じて変わるものだと思っている。従ってどんな絶景でもそこに住んでいる人たちにとっては日常なので、非日常ではなく感動もない。ただ景色や自分自身の変化で感じ方が変わる場合もあり、日常の中にも感動することもある。いや、その時は日常ではなくなっている。

旅での感動、それも大きな感動を得るには、同じ場所を避けて新しい場所に行くことで感動を得る確率は高くなる。やはり旅は知らない世界に行くことだろうと改めて感じる。



【二重カルデラ火山の青ヶ島全景 (海上保安庁の画像)】

■店のおばさん

島内で唯一の商店に立ち寄る。この店には酒や食料品の他に雑貨もおいてあり、島のコンビニと呼ばれるような店になっている。師匠が青ヶ島の特産品を気にしており、青ヶ島の焼酎「青酎」と火山の熱を利用して製塩した「ひんぎゃの塩」があるかを確認するために立ち寄ったが、店のおばさんに島のことを質問すると、いろいろなことを教えてくれる。

島の人口は160人、彼女が島に嫁に来てからほとんど変わっていないという。彼女は「もう少し人口が欲しいよね、あと50人いればいろいろなことができるのに」と言っている。御蔵島と利島の人口はどちらも300人、本音のところでは300人欲しいのかもしれない。

私が伊豆諸島を全部巡って来たことを伝えると、「どの島が一番良かったの？」という質問がくる。私は「青ヶ島もいいですが、神津島ですかね」と言い、そして「神津島の天上山は伊豆諸島の神々が集まり、天上山の裏砂漠、ハート池、天上山を背景にした多幸湾の絶景、飛び込みができる赤埼遊歩道、温泉もあって料理も美味しい」と熱く語る。

神津島を熱く語った後に「御蔵島の観光協会の方は、式根島を推していましたよ」と取って付けたように言う。こういうのを印象操作というのかもしれない。

話は海外旅行の話になる。海外ではどの国が良かったなどと話題は尽きない。彼女は旅行好き、それも大の旅行好きだが、今は家をあまり開けられないから、もう少ししたらリュックを担いで旅に出たいと言っている。

私が最近行った国ではモロッコが良かったと言うと、彼女は身を乗り出して質問してくる。「どんなところが良かったの、食べ物はどう、ヨーロッパみたいでしょう、映画をたくさん撮っていますよね」など切りがない。その中でもヨーロッパ文化の影響が強いことと映画の国になりつつあることは、私が実際に行って感じたことなのに、それを彼女は既に知っているから凄い。

私は名刺を渡して、この「この URL から入れば旅行記が読めますよ。モロッコのものありますから」と言って店を出る。

島内をひととおり回り、あとは宿に帰るだけになる。従ってレンタカーの運転もなくなるのでビールとつまみを買うために再び店を訪れる。

店のドアを開けると、何と、あのおばさんが私のモロッコの旅行記を印刷して読んでいるではないか。

これには驚いた。凄い行動力だ。

旅行先で知り合って旅行記を読むと言って読まない人が大多数だが、ぼっとやって来た人が書いたという旅行記を直ぐに印刷して読んでくれる人がいるなんて、私は感激する。

■島から出られない

宿に戻り、師匠の発案により本日の中間反省会が開かれる。まるで企業の事業計画の中間検討会のような名前だが、要は夕食までの時間で買って来たビールで一杯やろうというだけのようだ。私も嫌いな方ではないので中間反省会に参加する。それにしても何を反省したのやら。

反省会を終え、夕食になる。出てきた料理はほとんどが島内で獲れたもので結構ボリュームがある。さらにありがたいことに島の焼酎「青酎」もサービスしてくれる。

師匠は待っていましたとばかりに青酎のグラスを手にして美味そうに飲んでいる。私は地魚の刺身を島トウガラシに軽く浸けて食べる。独特の辛味が刺身の味を引き立ててなかなかいける。



【夕食の料理 右下が島トウガラシ】

民宿の女将が「明日のへりは微妙だね」と、不穏なことを口に出している。確かに今は風が強く吹いており雨も降っている。ただし明日は良化するものと、私たちは勝手に思っていた。

翌朝、目が覚めると風は昨夜より弱いですが、霧が出ている。女将の話では霧が出るとヘリコプターは飛ばないとのことだ。そして9時前に欠航の連絡が入る。1日1便なので本日はもう飛ばないはずだが、女将からは「夕方に臨時便が出るかもしれないのでその予約をしておいた方がいいよ」と勧められる。

ヘリコプターは東邦航空という会社が運行しているので来る時はその会社に電話をして予約した。しかし臨時便は村役場が決めて乗客の予約もとるので、私は村役場に電話する。

臨時便が出れば乗りたい旨を伝えてリクエスト予約をする。それから1時間くらいして村役場から電話があり、臨時便を飛ばす予定で座席は確保できたとの連絡が入る。ただし最終決定は臨時便出発の1時間前だと釘を刺される。

天候は回復に向かっており、これで夕方の臨時便で帰れるだろうと、レンタカーを返却し運転の必要もないから帰還を祝した祝勝会をしようと、買い出しにまたあの店に行く。

店のおばさんは「へり、残念だね」と言っている。私は「臨時便が出る頃には、晴れそうですね」と言うと、彼女は「梅雨時はこんな感じの霧が続くのよ」とまた不穏な言葉を発する。

午後3時前、天候不良のため臨時便は飛ばない旨の連絡が入る。師匠と私は善後策検討会を開催し、行動予定を列挙していく。さすがに2人の手にビールはない。

- ・本日は帰れないので今泊まっている民宿に連泊のお願いをする。
- ・翌日の朝のヘリコプターを予約する。
- ・本日八丈島に泊まる予定だったので予約してある宿のキャンセルをする。
- ・明日は八丈島から竹芝まで船で帰る計画だったが、宿泊費+船賃は飛行機代と同額程度なので八丈島の宿泊をやめ飛行機で帰る計画に変更し、八丈島13時50分発の飛行機を予約する。

そしてこれら一連の作業を2人で分担してこなす。幸いにして明日のヘリコプターも飛行機も全て予約できた。これはもう飲むしかない、夕方から再度の祝勝会がはじまる。



【霧のヘリポート】



【検討会など開催した私たちの部屋】

翌朝になり、昨日よりも霧は薄くなっているのに本日もヘリコプターは欠航になったという情報が入る。それでも不幸中の幸いで、船は八丈島を出港して青ヶ島に向かっているというから、船が接岸できれば私たちは船でこの島から脱出できる。

ただし船の場合は八丈島 13 時 50 分発の飛行機は間に合わないので、これをキャンセルして 17 時 25 分発を予約する。

レンタカーは昨日返却しているのので民宿の女将の厚意で港まで送ってもらい、女将が持たせてくれたおにぎりを食べて青ヶ島最後の乾杯をする。

それにしても前回も思ったが、この港は実にワイルドだ。おそらく日本で一番苦勞して造った港だろうと私は思う。波が高いので安全に漁船を係留する場所がないのでクレーンで漁船を吊り上げて陸置きをするという極めて珍しいスタイルだ。

この日本一ワイルドな港を私は師匠に是非見せたかった。そして案の定、師匠は驚きを隠せないで写真を撮りまくっている。



【漁船を吊り上げるクレーンの片側】



【クレーンの反対側と陸置きされた漁船】

船は 13 時 30 分出港する。3 時間で八丈島に着く予定だが、船は遅れている。船のモニターに映し出される到着予想時刻は 16 時 45 分になっており、空港まで行く時間を考えると 17 時 25 分発の飛行機に間に合うか微妙な時間になってくる。

来る時のタクシーの車内で運転手に聞いたことを思い出した。

現在の八丈島のタクシーは数台しかない。昔はもっとあったがレンタカーや観光バスにお客を奪われ、その後コロナが致命傷になって極端に減ってしまったと言っていた。

そのため少しでも早くタクシーをつかまえるために港に着く前に船の中からタクシーを呼ぼうとするが、どのタクシー会社も予約を受け付けてくれない。少ないタクシーを利用者に平等に利用してもらおうとしての配慮らしい。

八丈島底土港に着いてすぐにタクシーを呼び、受付の締め切り 5 分前に空港に着き、何とか間に合う。

第三章 旅を振り返って

■旅の目的

旅は目的を持つべきだというのが私の持論である。

何かの調査とかという立派なものがあれば良いが、あの料理を食べるとか、あの写真を撮るとか些細なものでもよい。要はそれを実行すれば旅の目的が果たせたとと言えるものだ。それは何も1つである必要もなく複数でもよい。その場合は優先順位をつけるのが肝要だろう。

さて、今回の旅は御蔵島に渡ることが目的だった。しかし訪島そのものが目的と言えるのか、いささか疑問だ。渡って何をすることがなかった。だから他の宿泊客がイルカウォッチングで感動して充実した旅をしているのに私たちはキョトンとしていた。

御蔵島に渡ったという証が必要だったのならば、出会った島民全員に「この島のイチオシは？」という同じ質問をするのもありだった。島民の人数を例えば300人の1割の30人にするとかすれば統計的にも成り立つので面白い。

青ヶ島に至ってはもっとひどい。私にとって2度目の訪島なので何も目的がなかった。島に渡ることにも目的になっておらず、ただ行っただけになった。

2度目だからこそできることもあったはずだ。例えば前回出会った製塩所で働き始めた青森出身の若い彼の一年後はどうなったかなどは、今にして思えば興味深いことができたはずだ。

青ヶ島から八丈島に戻るドタバタ劇は致し方ないとしても、八丈島から本土に戻る方法が反省すべき点だ。これはプランニングの問題というよりも、目的が無かったことが原因だ。

八丈島の宿を予約した理由は9時40分発の東京竹芝桟橋行き船に乗るための宿泊で、師匠も私も今回は八丈島訪島を目的としていなかった。だからレンタカーも予約しておらず、何となく船で往復するものだという先入観があり、それは船の方が安価というイメージだけだった。

実際のところ費用については、宿泊費+船賃が飛行機代と同じくらいだから最初から羽田空港に行く飛行機を予約しておくべきだった。それも17時25分の最終便を予約すべきだった。

結果的には1日遅れになったが、それも考慮して変更できるチケットで手配しておくか、最初から予備日をみて1日遅れの便を予約して直前キャンセル可能な八丈島の宿を予約しておくべきだった。

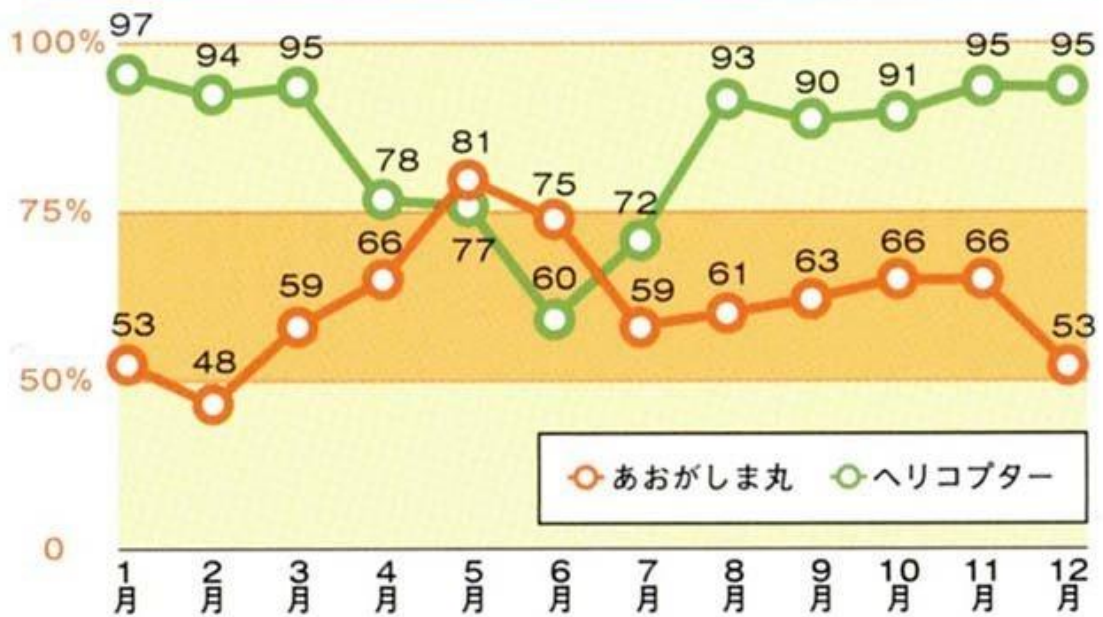
いずれにしても八丈島に立ち寄る目的を明確にしていれば、防げたことだろう。

■2島に渡る時期

鬼ヶ島に渡る手段として船とヘリコプターがあるが、私が以前調べた船の就航率は5割、ヘリコプターの就航率は8割だった。そのため今回の旅ではヘリコプターを優先して考えた。しかし青ヶ島からの帰りの便は、結局のところヘリコプターが3回欠航して、船で帰ってきた。

旅から帰って、師匠が興味深いものを送ってきた。

2014年～2016年 3年間の平均就航率 (青ヶ島村役場 調べ)



このグラフは八丈島と青ヶ島間の船とヘリコプターの月毎の就航率を表している。ヘリコプターの方が高いと思っていたが5月と6月は就航率が逆転して船の方が高い。8月から3月は圧倒的にヘリコプターが優位になっている。そして船の就航率の年平均は6割を超えている。

この統計期間の定期船は「あおがしま丸」で、今は「くろしお丸」に変わっているが、総トン数は両者とも500トン弱で大差ない。従ってこのデータは今も使えるだろう。

御蔵島については、竹芝栈橋から御蔵島に行く「橘丸」は5700トンもあり、船の大きさも違い、港の事情も違うので一概には言えないが、上記データは参考にすると4月～6月は比較的欠航が少ないと思われる。

御蔵島の民宿のイルカウォッチングの人たちの話では、冬はウェットスーツを着ていても陸に上がった時が寒いと言っていたので、イルカと遊ぶなら4月～11月が良いだろう。ただし秋は台風シーズンなので要注意だ。

■旅の記録

実施は2023年7月3日(月)～7月7日(金)の4泊5日(内船中泊1泊)、その行程を示す。

- ・1日目 20時に東京竹芝栈橋クルーズターミナルで待ち合わせし、近くの店で夕食
22時30分発の東海汽船の「橘丸」に乗船し出航、船中泊
- ・2日目 6時御蔵島港に入港、民宿の送迎車で民宿「山じゅう」に行き、チェックイン、宿で朝食兼昼食を食べ、島内の里中地区を散策し、稲根神社、観光案内所、イルカの見える丘、鉄砲場など巡り宿に戻る
- ・3日目 5時30分宿の送迎車で御蔵島港へ、6時05分発の橘丸で八丈島へ
橘丸の船内レストランで朝食、8時55分八丈島底土港に入港、
タクシーで八丈島空港へ行き、9時55分発のヘリコプターで青ヶ島へ、

10時15分青ヶ島ヘリポート着陸、ヘリポートでレンタカー借用
民宿「あおがしま屋」へ行きチェックイン、島内を車で散策して宿で昼食、
午後車でも散策し、大凸部（おおとんぶ）、青ヶ島（三宝）港、
ふれあいサウナ（休館日で入浴できず）、製塩所、地熱釜、ジョウマン共同牧場、
清受寺、尾山展望公園を巡る

- ・ 4日目 10時20分青ヶ島発のヘリコプターが悪天候のため運行取りやめ、
夕方の臨時便を予約したが、臨時便も再度の運行取りやめ、翌日の便を予約、
合わせて翌日の八丈島13時50分発の羽田空港行きの飛行機を予約
レンタカーを10時30分に返却したため、この日は民宿とその周辺で過ごす
- ・ 5日目 10時20分青ヶ島発のヘリコプターが悪天候のため再々度の運行取りやめ
八丈島13時50分発の羽田空港行きの飛行機をキャンセルし17時25分を予約
13時30分出港の定期船「くろしお丸」に乗船、16時45分八丈島底土港入港
タクシーで八丈島空港に行き、17時25分発のANA便で羽田空港へ
18時50分羽田空港到着し、横浜で打ち上げ、そして解散

1人あたりの総額は約95000円になった。

- ・ 交通費 57670円（1人当り）、その内訳を以下に示す。

船	11880円（竹芝→御蔵島 株主優待で25%引後の価格）
船	1750円（御蔵島→八丈島 株主優待で25%引後の価格）
タクシー	750円/2（八丈島底土港→空港 1台を他の客と相乗り）
ヘリコプター	11750円（八丈島→青ヶ島）
レンタカー	5000円/2（青ヶ島24時間、ガソリン代込み）
船	2950円（青ヶ島→八丈島）
タクシー	1410円/2（八丈島底土港→空港 1台分）
飛行機	24370円（八丈島17時25分→羽田空港）
キャンセル料	1390円（八丈島13時50分→羽田空港の予約取り消し）
- ・ 宿泊費 30900円（1人当り）、その内訳を以下に示す。

山じゅう	9900円（御蔵島の民宿、1泊2食付）
あおがしま屋	21000円（青ヶ島の民宿 2泊6食付）
- ・ 飲食費 約6000円（1人当り）
3日目の船内レストラン、4日目の昼食、酒つまみ類、
乗船前の夕食や打ち上げ費用なども含む

この他に自宅→竹芝棧橋、羽田空港→自宅の約1500円が発生した。